Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-06

農村の内発的発展におけるオーナー制度の運営に関する研究

中塚，雅也

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2004-03-31
(Date of Publication)
2012-03-22
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲3078
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003078

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

【 217 】

氏　　名・（本　籍）	中塚　雅也	（ 大阪府 ）
博士の専攻分野の名称	博士（学術）	
学　位　記　番　号	博い第４６８号	
学位授与の　要　件	学位規則第４条第１項該当	
学位授与の　日　付	平成１６年３月３１日	

【 学位論文題目 】

農村の内発的発展におけるオーナー制度の運営に関する研究

審　査　委　員

主 査　教　授　高橋　信正
教　授　高田　　理
教　授　堀尾　尚志
助教授　星野　　敏

本研究では、都市・農村共生社会の実現の一つの方法として、多様な都市・農村交流の取り組みが展開される中、これらが必ずしも想定した農村集落の内発的な発展に繋がるとは限らず、結果として活動が衰退し農村に疲労だけを残す場合が多いのではないかという認識のもと、オーナー制度に焦点にあて、その実態およびその抱える問題の構造を明かにし、今後の農村地域の内発的発展における運営のあり方を示すことを目的とした。

具体的には大きく次の 2 つの課題の解明を目的とする。まず一つは、オーナー制度がどのような特性をもち、実態としてどのように運営されているのか、またどのような構造で発展したり衰退したりするのかを内部者である農家らの視点から明らかにすること、もう一つは、そうした理解をふまえた上で、農村の内発的発展において望ましい運営方法を具体的に検討し、今後の都市・農村交流活動のあり方を提示することである。

関連する既存研究をみると、活動自体、もしくはその活動が農村にあたえる（一時点での）社会経済的なインパクトを外部から実証分析したものが大部分である。本研究はそうした一方で、活動結果ではなく内発的発展論にて求められる活動プロセスに着目して、活動の実態を内部者の視点から探り、活動自体の発展や衰退の構造を明らかにするところに特徴がある。つまり、本研究ではこれまでの研究とは異なり、農家らが交流活動にどのような意識で取り組み位置づけた上で、具体的にどのような方法で運営すれば、意欲的に活動をおこない満足が得られ発展し続けるかを明らかにするところに独自の意義がある。また、都市・農村交流の中でも、オーナー制度という取り組み自体については、その近年の展開に反して、その特性、運営の実態など未だ不明な点が多く、これらを明らかにすることも本研究の独自の意義の一つである。

なお、本研究は基本的には兵庫県の 19 のオーナー制度を対象とした複数ケース・スタディであるが、質問票調査（参加都市住民、近畿圏のオーナー制度）も実施するなど多様な方法を組み合わせておこなった。

第 1 章では、ケース・スタディをおこなう上で背景となる理論として、内発的発展論、行為に関する理論、交流に関する理論をとりあげ整理した。そこで内発的発展では、結果よりプロセス、経済成長より人間成長が重視されること、行為や交流に関する理論では、行為が動機－目的－行為という体系で整理されること、交流には手段的な側面と表出的な側面があること、交流自体に運動性があることなど本研究に進める上で有用な概念やアイディアを整理した。

続く 2 章では、既存の文献調査により都市・農村交流、オーナー制度に関する基礎的な考察をおこなった。様々な都市・農村関係に関する理論を整理するとともに、我が国の都市と農村が一体的なものから乖離するまでの歴史的経過、および現在の都市と農村の問題とその相互補完的な機能を明らかにするとともに、都市・農村交流が推進される政策経緯

を明らかにした。また、我が国および兵庫県における都市・農村交流、オーナー制度の現状や評価を概観した。

第 3・4 章では、農村にとってオーナー制度の意義や運営の実態の解明を試みた。
まず、第 3 章では基礎的な考察を補完するべく、オーナー制度の特性や農村側にとっての意義を、アンケート調査（有効回答 147）に基づく参加者意識分析により明らかにしている。オーナー制度の特性としては、年齢、志向とも多様な人を、比較的広域から誘致することを明らかにしている。また、農村にとっての意義として、参加都市住民の農業や地域に対する意識の高まることを確認した。

第 4 章は、兵庫県下 16 の事例へのインタビューに基づき、オーナー制度の運営体制や現状の運営が抱える問題を明らかにしている。オーナー制度の運営の体制を「独立型」「住民主体型」「全面サポート型」「作業受託型」の 4 つに分類し、それぞれの体制と運営実態との分析をおこなっている。そして、人的資源の乏しい農村地域において、行政等のソフト・ハード両面のサポートは不可欠であるが、それが農家らの主体性形成を阻害し、結果として活動が停滞し、当事者らの低い評価や不満に繋がっているというジレンマを抱えていることが明らかにした。

第 5・6 章は、オーナー制度の発展・衰退の構造を、住民意識から探るとともに、発展を可能とする具体的な運営方法の考察をおこなった。

第 5 章では、兵庫県篠山市「黒豆の学校」での 2 年間の参与観察により、当事者農家らの意識の分析から、受動的な活動が能動的な活動に変化する過程や要因を明らかにするとともに、「学校形式」が主体性形成に寄与するという評価も得ている。また、その結果をもとにオーナー制度の発展の構造・衰退構造のモデルを仮説的に構築した。

第 6 章では、目的が異なりながらも「発展の循環」にある 2 つの活動を事例とした追試的なケース・スタディである。事例は、直接販売の手段（流通チャネル）として実施している「黒大豆オーナー制度」と地域資源（里山）管理の手段として実施している「丹波おおやま里山オーナー制度」の 2 つである。この 2 つの事例の比較分析により、オーナー制度の発展・衰退構造のモデルが補完しているとともに、それぞれの目的にそった具体的な運営の方法を明らかにした。

第 7 章では、近畿圏のオーナー制度を対象としたアンケート調査をおこない（有効回答 50）、オーナー制度の発展・衰退構造のモデルの他、第 3 章以降のケース・スタディにより明らかにした活動の経過と現状、当事者農家らの活動評価や展望などを補完して体系的な考察をおこなっている。なお、発展・衰退構造のモデルからは、活動における目的設定の

重要性が指摘され、目的の設定・共有化ができた場合、発展の循環移行が可能であること、しかしながら活動自体を目的」とする側面を重視して位置づけ続けた場合、積極性は下がることが確認され、運営において段階的に社会的・経済的な手段へと転換することが求められること等を明らかにした。

最後の終章では、これまでの知見を要約するとともに、今後の今後のオーナー制度運営のあり方を都市住民との関係に基づいて提案している。それは、「固定消費者」「支援者」「協働者」であるが、それぞれには優越がなく農家の主体的な選択が重要としている。

また、今後の研究の課題として、活動の地域的展開や地域資源管理におけるオーナー制度のシステムの拡張に関する検討等をあげた。

（別紙１）　　論文審査の結果の要旨

氏名	中塚雅也			
論文題目	農村の内発的発展におけるオーナー制度の運営に関する研究			
審査委員	区分	職名	氏名	
	主査	教授	髙橋信正	印
	副査	教授	髙田　理	印
	副査	教授	堀尾尚志	印
	副査	助教授	星野　敏	印
	副査			印

要　旨

本研究は、都市・農村共生社会の実現の一つの方法として、多様な都市・農村交流の取り組みが展開される中、これらが必ずしも想定した農村集落の内発的な発展に繋がるとは限らず、結果として活動が衰退し農村に疲労だけを残す場合が多いのではないかという認識のもと、オーナー制度に焦点にあて、その実態およびその抱える問題の構造を明かにし、今後の農村地域の内発的発展における運営のあり方を示すことを目的としている。

具体的には、①オーナー制度がどのような特性をもち、実態としてどのように運営されているのか、またどのような構造で発展したり衰退したりするのかを内部者である農家らの視点から明らかにすること②そうした理解をふまえた上で、農村の内発的発展において望ましい運営方法を具体的に検討し、今後の都市・農村交流活動のあり方を提示することである。

なお、本研究の独自の意義は、これまでの関連する研究と異なり、活動のプロセスに着目して、その展開の構造を内部者の視点から探っていること、オーナー制度という取り組みが近年の展開に反して、その特性、運営の実態など未だ不明な点が多く、その解明を試みているところにある。

また、本研究は基本的には兵庫県の 19 のオーナー制度を対象とした複数ケース・スタディであるが、質問票調査（参加都市住民、近畿圏のオーナー制度）も実施するなど多様な方法でおこなっている。

第１章では、ケース・スタディをおこなう上で背景となる理論として、内発的発展論、行為に関する理論、交流に関する理論をとりあげ整理している。そこで内発的発展では、結果よりプロセス、経済成長より人間成長が重視されること、行為や交流に関する理論では、行為が動機－目的－行為という体系で整理されること、交流には手段的な側面と表出的な側面があること、交流自体に運動性があることなど本研究に進める上で有用な概念やアイディアを整理している。

続く２章では、既存の文献調査により都市・農村交流、オーナー制度に関する基礎的な考察をおこなっている。様々な都市・農村関係に関する理論を整理するとともに、我が国の都市と農村が一体的なものから乖離するまでの歴史的経過、および現在の都市と農村の問題とその相互補完的な機能を明らかにするとともに、都市・農村交流が推進される政策経緯を明らかにしている。また、我が国および兵庫県における、都市・農村交流、オーナー制度の現状や評価を概観している。

第３・４章では、農村にとってオーナー制度の意義や運営の実態の解明を試みている。
まず、第３章では基礎的な考察を補完するべく、オーナー制度の特性や農村側にとっての意義を、アンケート調査（有効回答 147）に基づく参加者意識分析により明らかにしている。オーナー制度の特性としては、年齢、志向とも多様な人を、比較的広域から誘致することを明らかにしている。また、農村にとっての意義として、参加都市住民の農業や地域に対する意識の高まることを確認している。

第４章は、兵庫県下 16 の事例へのインタビューに基づき、オーナー制度の運営体制や現状の運営が抱える問題を明らかにしている。オーナー制度の運営の体制を「独立型」「農家主体型」「全面依存型」「作業受託型」の４つに分類し、それぞれの体制と運営実態との分析をおこなっている。そして、人的資源の乏しい農村地域において、行政等のソフト・ハード両面のサポートは不可欠であるが、それが農家らの主体性形成を阻害し、結果として活動が停滞し、当事者らの低い評価や不満に繋がっているというジレンマを抱えていることが明らかにしている。

氏名	中 塚 雅 也

第５・６章は、オーナー制度の発展・衰退の構造を、住民意識から探るとともに、発展を可能とする具体的な運営方法の考察をおこなっている。

第５章では、兵庫県篠山市「黒豆の学校」での２年間の参与観察により、当事者農家らの意識の分析から、受動的な活動が能動的な活動に変化する過程や要因を明らかにするとともに、「学校形式」が主体性形成に寄与するという評価も得ている。また、その結果をもとにオーナー制度の発展の構造・衰退構造のモデルを仮説的に構築している。

第６章では、目的が異なりながらも「発展の循環」にある２つの活動を事例とした追試的なケース・スタディである。事例は、直接販売の手段（流通チャネル）として実施している「黒大豆オーナー制度」と地域資源（里山）管理の手段として実施している「丹波おおやま里山オーナー制度」の２つである。この２つの事例の比較分析により、オーナー制度の発展・衰退構造のモデルが補完しているとともに、それぞれの目的にそった具体的な運営の方法を明らかにしている。

第７章は、近畿圏のオーナー制度を対象としたアンケート調査をおこない（有効回答 50）、オーナー制度の発展・衰退構造のモデルの他、第３章以降のケース・スタディにより明らかにした活動の経過と現状、当事者農家らの活動評価や展望などを補完して体系的な考察をおこなっている。なお、発展・衰退構造のモデルからは、活動における目的設定の重要性が指摘され、目的の設定・共有化ができた場合、発展の循環移行が可能であること、しかしながら活動自体を目的」とする側面を重視して位置づけ続けた場合、積極性は下がることが確認され、段階的に社会的・経済的な手段へと転換することが求められること等を明らかにしている。

最後の終章では、これまでの知見を要約するとともに、今後の今後のオーナー制度運営のあり方を都市住民との関係に基づいて提案している。それは、「顧客」「支援者」「協働者」であるが、それぞれには優越がなく農家の主体的な選択が重要としている。
また、今後の研究の課題として、また、活動の地域的展開や地域資源管理におけるオーナー制度のシステムの拡張に関する検討等があげられている。

以上のように、本研究は現在都市と農村の交流の方法の一つとして重視されているオーナー制度を多くの詳細な事例分析と理論構築によって、その実態、課題、発展・衰退、運営のあり方を解明したもので、これまでにない重要な知見を得たものとして価値ある集積であると認める。

よって学位申請者中塚雅也は、博士（学術）の学位を得る資格があるものとして認める。